

消えた滝



むかしむかしの話だ。吉野朝のころのことだというから、今から六百年も前のことだ。

そのころ、峰翁祖一という和尚さんがいた。岩村の大円寺を開いた和尚さんで、京都の有名な和尚さんと並ぶほどの高僧であった。

この和尚さんが、阿木の行事岳のふもとに、大禅寺という寺を開いた。徳の高い和尚さんだったので、説教を聞きに来る村人は、いつも堂にいつぱいだっ

た。
ところが、この寺にも困ったことが一つあった。それは、この寺をめぐるよ
うに流れている川だ。急な流れで、本堂の前あたりには滝もあって、激しい
水の音が寺にひびいて 和尚さんの話も聞きとれないほどだった。
「今日も、いいお話だったなあ。ありがたいことだ。」

「そうか、わしはうしろの方だったんで、よく聞けなんだわ。」

「そうや、わしもや。川の音が苦になつてなあ。」

こんな話が、村人の間にひろまっていった。うわさを聞いた和尚さんも、

「そうに違いない。話をしているわたしでさえ、苦になるんだからなあ。」

と、言いながら、滝のほとりに立って、しぶきをあげて激しく流れ落ちる水を見つめて、「何とかならぬものかなあ。」と考える日が多くなった。

そんなある日、一人の見知らぬ老人が、村人にまじって、祖一和尚の説教を聞いていた。説教が終わると、

「和尚さん、よいお話を聞きました。それにしても、川の音がじゃまになりま
すなあ。」

と言う。祖一和尚は、

「そうなんですよ。何とかならぬものかと、毎日思案はしますが、この滝の音
ばかりはねー。」

と、困りはてた表情だった。老人は、

「和尚さん、よいお話を聞いたお礼に、わたしが川の音を消してあげましょう。」



と、言った。和尚さんは、老人の言葉に驚きながらも、「無理なことだ。とてもそんなことはできるものではない。」と言った顔つきで、老人を見ていた。

しばらくすると、にわかにかが曇ってきて、あたりが暗くなり、激しい雷がなりわたったかと思うと、老人の姿は竜に変わって、折からの稲妻に光りながら天にのぼっていった。それから大雨が降り出して、三日三晩降りつづけた。

和尚さんも、村の人たちも、どうなることかと、気が気でなかった。

四日目、降りつづいた雨が止んだと思うと、さわやかな朝になった。空の色は、もう秋かなと思わせるほど澄んでいた。祖一和尚が、いつもものように庭に下りて、滝の方へ行こうとすると、滝の音が聞こえない。静かなものだ。不思議に思いながら、川のそばまできて驚いた。激しい水音をたてて、流れ落ちている滝がなくなっている。さらさらと静かな流れが、朝の光に輝いているのではないか。「これは、どうしたことだ。」と思って、川に沿ってくだっていくと、一キロほどしたところに滝がうつっていた。三日三晩降りつづいた雨で、滝はそのまま一キロも川下へ流されていたのだった。

和尚さんは、「不思議なこともあるものだ。さてさて、あのご老人はいった

い何者だったろうなあ。」と不審に思いながら、「それにしてもありがたいことだ。これからは、みんなに静かに話が聞いてもらえるなあ。」とよろこんだ。

集まってきた村人たちも、あまりのvariように驚きながら、

「これはきつと、神様のしわざだ。」

「和尚さんがりっぱな和尚さんだから、和尚さんの願いを、土地の神様がきいてくださったのだ。」

「そうだ、そうだ。それに違いない。」

などと、話しあった。

今も行事岳のふもとの林の中に、村人たちが竜泉寺蹟とよぶところがある。大禅寺はここにあつたということだ。

文・大島 虎雄
絵・藤原 梵

さい

妻の神



むかしむかしの話。天文のころというから、今から四百五十年も前のことだ。室町幕府の勢がだんだん衰えてきたので、地方では豪族が、力をほしいままにして、国々が乱れはじめていた。が、この美濃の国の阿木のあたりは、まだ平和でのどかな日々がつづいていた。

ある日、阿木から岩村へ越える坂のあたりの道端に、一人の娘が倒れるようにして休んでいた。上州安中の豪族の娘で、関東でも大乱が起つて、安中もその戦にまきこまれ、豪族は土地も家も失い、家族もほとんど亡くなった。難のがれてただ一人生き残った娘だった。長い間、音さたなかつたが、一人の兄が京に上つて修業していた。その兄を頼ろうと、ようやくここまで来たが、病弱の上に慣れない一人旅の疲れで、もう歩くこともできなくなっていた。

娘は、安中によく似た、静かで平和そうな、この阿木の山里を見ながら、

「さて、これからどうしたものか。」と、思案にできているところだった。すると、野良帰りの老夫婦が通りかかって、

「もし、どうかなされたか。」

と、声をかけてくれた。娘はようやく体を起しながら、事の次第を話した。

「それはお気の毒な。心は先へ急ぐでしょうが、体が何より大事。少しここで休んでゆきなされ。」

と言つて、小屋をかしてくれた。娘は親切な老夫婦に助けられて、しばらくここで暮らすことにした。それにしても、知らない土地での一人暮らしは、大変だった。

寒い風の吹く夜など、楽しかった安中のくらしのこと、戦に亡くなった父母のこと、京に上つて帰らない兄のことなど思い出されて、早く病気をなおして京に上りたい、そして兄に会いたいと、しきりに思うのだった。

そんなある晩、とんとんとと戸口をたたく者があった。こんな夜更けに誰だろうと思っていると、

「お頼み申す。お頼み申す。」



と言う。戸を少しあけてみると、一人の旅人が立っていて、

「旅の者だが、一晚の宿をお頼み申す。」

と、言った。娘は、あまり突然のことであり、粗末な小屋だし、困っている
と、また、

「ご迷惑でしょうが、お頼み申す。実は、京からの急ぎの旅で、疲れはててし
もうた。一夜の宿を、」

と言う。「京からの旅」と聞いた娘は、「ひよっとしたら京の話が聞けるかも
しれない。」と、思ったのでしよう。

「こんな粗末な小屋ですが、よろしかったら。」
と言って、とめてやった。

翌日になって、娘がゆうべから考えつづけていたこと、京のことを尋ねよう
と思った。

「京からの旅とお聞きしましたが。」

と言いかけると、男は、

「さよう、拙者は上州安中の者だが、長いこと京で修業しておった。風のたよ

りに、関東で大乱が起り、安中也戦場になったと聞きましてな。急いで帰ると
ころや。やっかいをおかけ申したな。」

と言う。

「それでは、若しや兄さんでは。」

娘は思わず口走った。そして、よくよく話してみると、幼いとき別れたまま
の兄だった。娘は、安中の戦のこと、兄を頼ろうと思つて、京へ上る途中、病
気にかかり、やむなくここで暮らしていること、一部始終を話した。

兄妹は、夢のような思わぬめぐりあいを喜びあつた。そして、早く安中に帰
り、家の再興をはかろうと誓いあつた。だが、思いがけない兄との再会に、安
心したのでしょうか。娘は、急に病が重くなって、亡くなつてしまった。兄も
また、旅の疲れや気づかれに、妹の死の悲しみが重なつたのか、つづいて亡く
なつた。

村人たちは、遠い故郷の安中へ帰ることもできず、また家の再興を夢みなが
ら、遂に果たすこともできず、若くして亡くなつた兄妹を哀れんで、二人を同
じところに葬り、小さな祠を建てて祭つた。これが今の妻の神の社だ。

黒田川にかかる塞之神橋を渡って、坂道を少しのぼると、右側に妻の神の社がある。この社に願いごとをかけてお参りすると、靈験があるということだ。今でもお参りする人が多いということだ。

文・大島 虎雄

絵・加藤 公雄

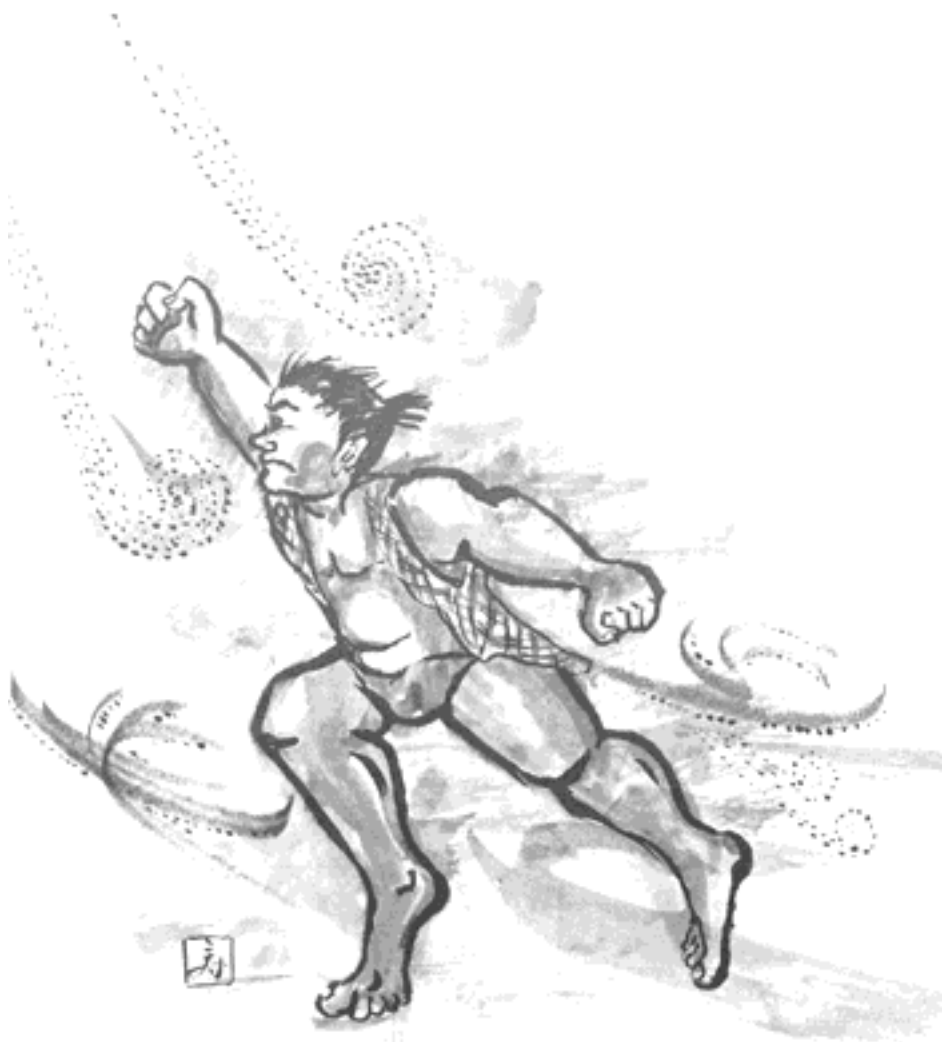
雷石

むかしむかし、いつのころやらはつきりせんほど、むかしのこと。今と変わらぬ山あいの小さな村であったが、阿木は青野村とよばれておった。山にはでかい良木が、空をおおうばかりにそびえたっておった。山一面の大木が立ちならんでおる様は、まことに立派なもんであった。

ところが困ったことに、夏になると毎度、毎度、夕立つ様がその大木の間をたび歩いて、雨ふらし、畠を流し、山を崩して、大暴れをするのであった。

村の人は、今度夕立つ様がおいでたら、存分にこらしめたいが、なんかいい方法はないものかとよりあった。みんなでひたいをよせあって、ああだ、こうだと相談してみたが、いっこうに良い考えはうかんでこない。村の人達が困った、困ったと思案していると、力持の剛力があって、

「今度、夕立つ様が暴れさしたら、おらあがひつとらえてくれるに。」



とえらい張り切りようで、手ぐすねひいて待つておった。

その年の夏がきた。ある日、にわかにか空が暗くなったかと思うと、またたくうちにまっ黒な雲があらわれ、そしてひどい雨が降りだした。雨はななめに降り、横に走り、かと思うと、地面に落ちた雨が、空まではねあがるほどの暴れようであった。その雨と共に、ものすごい稲妻が、空を駆けまわった。

「そら、おいでたぞ。」

剛力は勇んだ。待ちに待った夕立つ様のおいでだ。剛力は、ぷるっ、ぷるっ と体をふるわせると、かっと目を見ひらき、口を一文字にひきむすんで、夕立つ様のあとを追いかけた。ところが夕立つ様は、なかなかすばしこかった。剛力があとを追うのでおもしろがって、うしろをふりかえり、ふりかえりしながら、広い空をピカピカ、ゴロゴロ、キヤアキヤアとはしゃぎまわった。どかあんと大きな音がしたかと思うと、大木がパリパリと音をたてて、まっぶたつにさけてとんだ。

「いくら夕立つ様だつて、もうかんべんできん。ひつとらえてくれえずに。」
剛力はいきりたつて、腕をぶんぶんふりまわした。そして大きく息を吸いこ

むと、いつきに暴れる夕立つ様にとびかかった。(自由に空かけるおらあとびついてくる剛力は、まさかこの世にやおるまい)と思っていたから、夕立つ様はおどろいたのなんのって。

「おいらあを、とりおさえようなんて、なまいきな。」

「なんの、おらあ、音にきこえた剛力だ。青野村の人々が困っておるに、毎年毎年、ようも思いつきり暴れてくれるな。おらあが、さんざんいためつけて、もう空にやかえれんようにしてくれえずに。」

剛力が思いつきり腕に力をいれて夕立つ様しめあげると、夕立つ様はひいひい声をあげて、

「すまん、すまん、すまんこつてす。もう二度とこないたずらは、いたしません、どうか空へかえしてください。」

と、ぺっこりぺっこり、頭をさげた。

「ならん、ならん。」

剛力がいうと、

「どうかお許しを、どうか、どうか。」

夕立つ様は、いかつい顔して、ぼろぼろ涙を流してあやまるもので、剛力はなんだかあわれになってきた。

「おらあ、許してやりたいが、許してやってまたまた、暴れだいたら困るで…、二度と暴れんという証拠になるものを、おいていけ。」

剛力の言葉に、夕立つ様はぴたりと涙をとめて、

「証拠といつても、おらあごらんのようにすっ裸で、なんにも証拠に残すようなものがない。」

夕立つ様は、首をひねりひねりしておったが、パンと両手をたたくと

「そうだ、いい考えがある。おらあの手跡を証拠においていこう。」

そういうと、すぐあしもとにある大きな石に、びたんと手をあてた。するとなんと、石に深々と夕立つ様の手跡がついた。

「それじゃあ、これでおらあ、空にかえらせてもらいます。」

そういつて、剛力に頭を一つ、ていねいにさげると、みるみる間に空高くのぼっていった。

それ以来、どれだけ夕立つ様がなっても、音だけで、青野村にはけっして雷



は落ちてこなくなったということだ。

青野上の田んぼの中にある、雷石とよばれている大きな石がそれだ。雨にさらされ、風にふかれて、手あともすこしばかりうすくなった。

近いうちに、阿木川ダム工事で、水の底に沈んでしまう。せっかくの夕立っ様の証拠品だから、流されることもなく、ダムの底でどっしり座りこんでいてくれるだろう。

文・三戸 律子

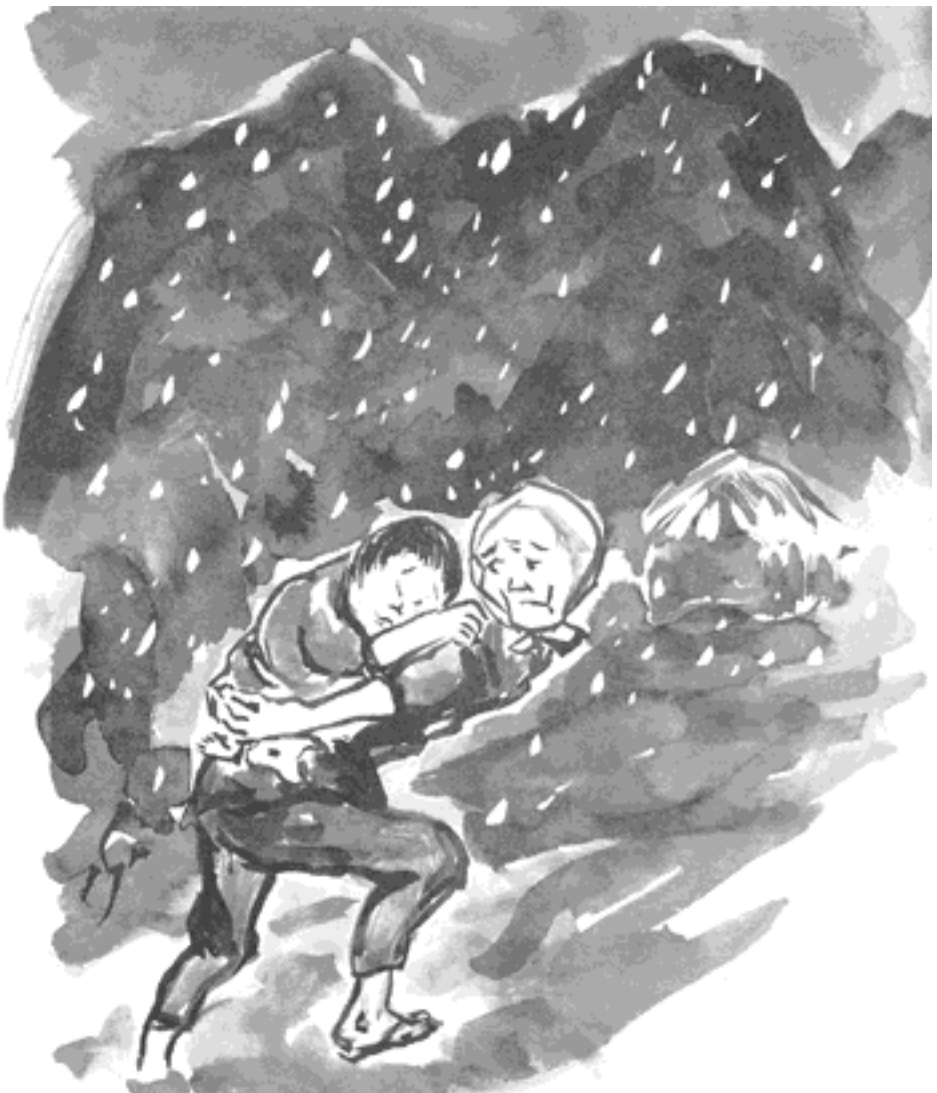
絵・大橋 寿美代

すりこぎかくこのだんじり



むかしむかし、阿木のおじいさんと小さい娘が、二人つきりですんでおった。おじいさんは若い頃、はやり病で、左の足首から先がこっそり、くさっておちてしまった。その足は、まるですりこぎのようであったから、村の衆は「すりこぎの足のじいさま」と呼んでおった。ほうして「業病だで、うるつぞよ。」と言いあっておったもので、おじいさんと娘は、人里離れた山の中で、ひっそりとくらすことになった。

おじいさんは不自由な足で段々畑を耕やし、豆だの、菜っぱだのをつくっておった。ところが、山の段々畑は日当りが悪くて、恵那山からふきおる風は、年がら年中、冷たい。その冷たい風に首をすくめて、畑の作物はなかなか大きくならなかつた。娘は、「あーあ、おら、はようでこつなつて、すりこぎ足のじいさんの手助けをしてやりたいもんだ。」と思っておった。



暮れもおしつまった二十一日。娘は、おじいさんと、わずかに畑に残った青物をぬいておった。暗くなった空からは、ちらちら、粉雪がまっつておった。

「じいちゃん、今年もお正月さんは、ちゃんとござるやるか。」

娘が心配そうに言くと、おじいさんは、

「お正月なんぞ、どうせんでもござるで、おんしが心配することありやあせん。と言い言いしたが、娘は今年はこのほか、畑の作物のできが悪かったことをよう知っておった。「食うもんがおもうよういなきゃ、せめて、おてんとさまなど、照つとくれんかのう。」娘は、空見上げてが、ごみつぶのような雪が休みなくほとほと降り続けばかりであった。

「じ、い、や、ん、」

娘はおじいさんを呼んだが、どうしたわけだかその声がかすれて、体がどろろとあつくなくなってきた。そしてひやひやと冷たくなったかと思うと、わずかに降りつもった雪の上に、よろりと倒れてしまった。おじいさんは、

「んー……。」

とふりかえると、あわててすりこぎ足をふんばり、背中に娘をおしあげた。よ



うやく草ぶきの家にころげこんで、おじいさんは娘をふとんに寝せた。娘の顔をのぞきこんだおじいさんは、たまげた。何年か前、まだおじいさんが若かった頃、同じようなはんでんが顔一面にでき、やがてポツリポツリと体中にひろがった、と思つたら、足の先がしびれ、ほどなく足首から先が落ちてしまつた。あのときと同じはんでんが……おらとおんなじすりこぎ足に……どうしてこんなことになつたかのう。……おじいさんは熱にうなされて、ふうふう、あらゆる息をしている娘の顔を見ながら、ひとりごとを言つた。(なんぞ精のつくもんを食べさせないと、病に負けてしまふ。)

おじいさんは家の中を見まわしたが、ほうれん草と大根が、わずかばかりあるだけであつた。おじいさんは村へおりていつて、どこぞで米をわけてもらおうと思つた。早速村へおりていつて、二、三軒戸口をたたいてみたが、どの家でもおじいさんのすりこぎ足を見て、ことわられた。おじいさんはどうしても娘に、あつたかいおじやを食べさせてやりたいと思つた。

「すれば、おいらのようすりこぎ足にならないですむだろうに……、そうだ、庄屋様の広い田んぼの中じゃ、まんだ落穂があるやしれん、行つてみよう、」

おじいさんは、ちらちら、雪の降る中を、庄屋様の田んぼへ急いだ。

「うう、さぶ、この世に仏様があるんなら、田んぼで雪かき分けて落穂をひろうおらのために、どうぞ雪がやむようにお願ひしたいものだ。」

おじいさんがつぶやくと、その願ひが通じたものか、雪がやんだ。おじいさんは大喜びで、田んぼに落ちてゐる落穂をひろつた。落穂は、おもいのほかたくさんあつた。両手に落穂をかかえて家まで帰つたおじいさんは、早速あつかいおじやをたいて、娘の口に入れてやつた。

「じいやんも、食べられ。」

「おんしが、たとと食べれ。たとと食べりや、熱がさがるで。」

おじいさんは、おいしそうに食べる娘を見て、目を細めた。

次の朝早う、ドーン、ドーンと戸をたたく音で、おじいさんは目がさめた。

「おいおい、庄屋様の田んぼをあらしたのは、お前だな。かくしてもだちかん。ちゃんと田んぼの中に、すりこぎ足のあとが残つておつた。それが、動かぬ証拠だ。庄屋様のお屋敷まで出ませい。」

庄屋様のお使いは、大きな声でのべると、すりこぎ足のおじいさんをひつた

てて山をおりていった。娘は、泣き泣きあとを追ったが、じき、お使いにひつたてられたおじいさんの姿は見えなくなった。それっきり、娘の姿を見たものはない。すりこぎ足のおじいさんがどうなったのか。村の人は誰も知らない。

阿木の人達は、それ以来、暮れの二十一日になると、すりこぎかくしのだんごをつくるようになった。

「あのとぎ、雪がどんどと降って、すりこぎ足のじいやんの足あとを消してくれていたら、こんなことじゃあ、ならなんだものを。」

そう言いながら、まるいおだんごのまん中に、ひとさし指で穴をあけるとい

文・三戸 律子

絵・吉村 茂夫